

民國卅五年三月十日發行

定價貳元五角

譯者 出版文化編輯局

印刷處 文明印書館

臺北市八甲町三ノ六三

發行處 臺灣出版文化社

臺北市西門町二ノ一四

前

奏

曲

美國  
道報  
選書

目

本

占

領



# Prelude to Occupation

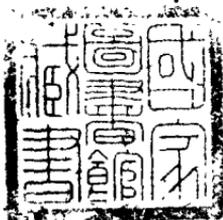
## 曲奏前領占本日

### 配員派特「クンヤ」

解説

ボツダム宣言受諾から米第三艦隊の相模灣  
進入まで、伊江島で、マニラで、相模頭で、  
展開された一大スペクタクル。

「ヤンク」の三特派員デール・クラマー、  
ラルフ・イザアド、エバン・ウイリイの三  
つの手記から構成されたルポルタージュで  
ある。



輝く眞晝の空に 日本機が二機、ぼつかりと現れた。きらめく珊瑚礁の飛行場の上に滑らかに浮んで、飛行場に塗られた白十字の大きな記號を確かめると、その上を通り越して傾いて旋回した。兩機の外側にはアメリカのB15中型爆撃機が飛んでゐた。日本機は護送警官の兩腕でしつかと抱きかゝへられてゐるやうに見えた。

飛行場の周囲は劍付銃を持つたアメリカ兵の細い輪で取り巻かれてゐた。そしてその背後は、まるで野球試合で満員の外野席につめこまれたファンのやうに、固い珊瑚の堆積の上で兵隊たちで一杯に取り巻かれてゐた。飛行場の中には巨きなC54輸送機が二機並んでゐた。

日本機と銀色のC54機の出現はアメリカ軍の指示に依るものだつた。一週間前から、日本は遙か遠くから聯合軍に渡りをつけてゐて、その申入れの中には降伏の氣配を十分に含んでゐた。聯合軍最高司令官ダグラス・マツカーサー元帥は、忌憚なく談合し得る代表團をマニラに派遣するやうに命令し、他の詳しい命令も明示された。彼らは綠十字の記號をつけた白い飛行

機で、日本から沖縄の北東十二哩の伊江島まで飛來するやうに命じられた。其處で彼らはマニラまで運ばれるアメリカ機に乗り換へる筈であつた。

豫定より四十八時間遅れること及び使用機を一機ではなく二機にすることの許可を求めたのは別として、命令は完全に應諾されたのである。

飛來した二機はP38戦闘機隊が日本本州の南端の九州の端で見付けた。そして彼らは第二隊に引づくまで護送し、第三隊が又その後を引受けたのだつた。伊江島では、島から西二十哩附近で對空監視哨が探知機につかまへてゐた。

日本機は我々が「ベツテイ」と綽名をつけてゐる雙發の爆撃機でなかくの優秀機である。

今や、アメリカの市民は家庭で、兵隊は守備隊や戦場で、戦の終つた熱狂的な祝典に解放された喜びを謳つたこの一週間後、此處白い伊江島の燃ゆる大空に嚴たる降伏の使者がその實體を現したのである。珊瑚の外野席で兵隊たちは眼に手をかざして上空をじつと見つめた。日本機を見つめる眼が靜かに動くだけで、彼らは身動きもせず物も云はずだつた。

白い「ベツテイ」は三度飛行場の上を飛び去つた。着陸コースを確かめ、適當な信號を待



ち、最後の瞬間をためらつてゐるやうであつた。兩機とも十字を五つペンキで描いてゐた。左の翼に一つ宛、兩側に一つ宛、五つ目は尾翼に描いてつゝあだが、地上からは綠色と云ふより黒つぽく見えた。

四度目にやつと日本機は着陸する爲に高度を下げた。第一機の呼出サインは日本を出る時から「バタアン一號」となつてゐた。第二機は「バタアン二號」である。彼らが頭上をさつと飛び過ぎる時。出發まで四日も準備期間があつたのに白ペンキがせつかちに塗られてゐるのが見えた。ペンキは穢になりところ／＼汚點がついてゐた。この期に臨んで日本人はいゝ加減にやつたと見える。

「バタアン一號」が滑走に入つた時、副操縦士が片手で小窓を開け、案内のジープが指示するコースを操縦士に教へる爲に機の鼻先をもう一方の手で強く叩きながら立つてゐた。六人の乗組員はカメラマンや新聞記者や憲兵や通譯の群と飛行場を取り圍んだ兵隊の大群とを眼をまるくして見下しながら坐つてゐた。

飛行士たちは飛行眼鏡を掛け、折り返した兔毛の耳覆のついた革の飛行帽をかぶつてゐた。

彼らの胡桃色の外套はとても厚くて重さうだつた。窓の向ふに何となく心やすげに見えた。

そしてすぐに一人が降りて來た。通路はマンホール位の廣さだつた。描かれた十字の一つがドアの上のままで伸びて、上下左右に暗緑色のペンキの汚點が飛び散つてゐた。

しばらくして、日本人にしては背の高い、瘦せた男が降りて來た。彼はスポーツコートを着、光つた靴をはき、膝まで届く白いストッキングをはいてゐた。帽子はかぶらず、眼鏡をかけた、細い顔にはちよび髯がくつきいてゐる。後になつてそれが一行中の二人の非軍人の一人である外務省秘書官の湯川守雄だつたとわかつた。

つゞいてその出口と、背後に停止してゐる「バタアン二號」の出口から、軍帽をかぶり、鐵甲縁の眼鏡をかけ、金色の參謀肩章をつけて軍刀を下げ、拍車のついた長靴をはいた連中がぞろ／＼と出て來た。

劍付銃の背後の外野席からアメリカ兵たちは尙靜まりかへつて、この歴史的な光景の中にある自分を意識しながら、じつと見守つてゐた。

出て來た日本人の一行は通譯に取りかこまれた。

一行は全部で十六人だつた。陸軍の軍服を着てゐるのもあれば普通人の服装をしてゐるのもだ。この代表團の首席である日本大本營の河邊藤四郎中將の參謀肩章は彼の肩から黄金の洪水と云つた感じで美しく垂れ下つてゐた。彼は拍車づきの長靴をはき、大きな反りのある日本刀は地面をかする位たつた。

一行は、狭苦しい爆撃機の中に閉ぢこめられて來た後、熱い陽に照らされて元氣が無いやうに見えた。日本の武士道の作法の中には降伏と云ふ事態に處する術は嘗て無かつた。日本の打ち碎かれた夢の代表者たちは何が何だかわからず淋しく孤獨であるやうに見えた。珊瑚の屑の上を通つてC54機の巨きな翼の下にばらばらに歩いて行く時も彼らはむつりしてゐた。見てゐる者にはいかにも不興げで意地悪いやうにさへ思はれた。もつとも、彼らが西洋式の作法を眞似て、敗戦にも拘らず軍人としての威嚴は保たうと試みたのかも知れなかつた。が、それはうまく行かなかつた。

翼の下で彼らは短い列を作つて並んだ。飛行士たちも駆足して來てその後に集つた。

列の右前に河邊中將が立つてゐる。眼鏡も掛けず髻もない彼の美しい顔は心もち右にかしい

で、眼はしつと伏してゐた。

日本人に向ひ合つて、二十呎ばかり前に、大平洋戦に於ける早期からの戦士である第五戦隊のフレデリック・H・スミス代將が立つてゐて、指令の文書を手交した。彼はそれから、代表團がマニラに直行すること、飛行士には伊江島で宿泊の世話をすることになつてゐる旨を語つた。その言葉が通譯されると河邊中將は眼を上げずにうなづいた。

やがて隊形が崩れ、日本人たちはC54機に乗り込むために列を作つた。そして、彼らの威厳を保たうとするせいでもあれば、長い軍刀のせいでもあつたのだらう、ゆつくりと梯子を昇つて、大きな戸口から中に入つた。機は航空隊の連中が「ブラッシュ・チョップ」と綽名をしてゐる奴で、窓にはカーテンがあり、真中の通廊の兩側に二列の座席が作つてある。ウルトラモダンの列車の新別車の内部と同じだ。日本人たちはマニラまで手足をゆつくり伸ばし、ほんとにゆつたり出来る機會を得たわけである。

見下すと、日本人の飛行士たちは「ベッテイ」から彼らの装具を引き出してジープに積みこみ、彼らもそれに乗り込んでゐた。

そして一方では寫眞班員が憲兵の警戒線を破つて機の周りに押し掛けて來てゐた。

その瞬間にいきなりC54機は唸り出し、四つの強力な發動機の轟音がぐい／＼強まつて、周囲の空氣を一層騒ぎ立たせた。そして巨大な機はぐいつと重苦しく向を變へて走り出し、すう／＼と引き上げられると、沖繩に向つた。

若し日本人たちが窓から外を見たら、下方の飛行場には彼らが今まで何處でも一ヶ處では見たこともない程の澤山の飛行機が集つてゐるのにびつくりしたにちがひない。

この間、珊瑚礁の外野席の兵隊たちはこの不思議なペノラマを身動きもせず黙つて見守つてゐた。が、今や彼らの注意は手近なものに惹かれた。小さな牽引車が「ベツタイ」機を分散區域に引張つて行き始めてゐた。其體には何か手に入れられるものがありさうだつた。良い記念品を漁らうとする連中がわあ／＼とたかつてゆくのが見えた。

憲兵の警戒線が嚴重に緊きしめられた。兵隊たちが雪崩れこむのを防ぎとめるのはやつとだつた。憲兵たちは怒鳴つたり押しかへしたりして、やうやく喰ひ止めることが出來た。

「ベツタイ機」の周圍にすばやく鐵の鎖が張り廻されると、兵隊の一人が、

「何のこつたい。役に立たなくなつた日本の飛行機が二臺あるだけのこつた」と云ふのが聞えた。

——デール・クラマー——

## ヒリツピン・マニラ

東京に於ける降伏の調印を準備するためにニコラス飛行場に連れて來られた日本の將軍や佐官や普通人の前で憲兵たちは背を向けてゐた。彼らは日本の使者に敬禮する必要は無かつたのだ。

日本人の到着を見るために集つて來てゐた兵隊や士官やヒリツピン人の群の中からほんの僅かばかり「バンザイ」の叫びが擧つた。誰かが「東條は何處だ」と叫んだ。

日本刀や高級將校の肩から垂れた派手な金色の參謀肩章よりも一つのスーツケースが注意を惹いたそのスーツケースには「サーフランシス・ドレーク・ホテル——サンフランシスコ」と讀まれるレッテルが貼つてあつた。

日本人の一行をマニラまで運んで來たC54機から最初に降りて來たのは使節團の首席である河邊中將だつた。

河邊中將は日本刀を釣つてゐた。一中の士官連中も同様だつた。群つたアメリカ人たちは何が良い記念になるものはないかと云つた風に熱心に彼らを見つめてゐた。河邊中將はマツカーサー元帥の募僚中の日本通であるE・F・マツシュバー大佐を見つけると敬禮をして手を差し出した。マツシュバー大佐も手を伸ばしたが、公文書を持つてゐるのに氣がつくと急いでそれをひつたくつた。

日本使節團の首席は天皇の代理としての信任狀を提出する時になると、すつかり泰然自若たる態度をなくしてゐた、と、ワルター・J・クナツプケが語つた。クナツプケはマカツーサー元帥の參謀長リチャード・K・スザーラード中將が持つてゐる部屋に河邊中將が入つて來た時、その場に居合せたのだつた。

「最初彼は信任狀を床に落した。それから彼はそれを拾ひ上げたのはいいが、スザイサンド中將に手交する前にそれをくしゃくしゃにしさうだつた」と彼は語つた。

一行中の若い將校が一行のために煙草を一人一つ宛買はうとした。彼はラツキイストライクを望んだけれども、ファイリツプモーリスで満足しなければならなかつた。彼は代金を二十弗紙幣で拂つた。そしてヒリツピン紙幣でお剩りを出されると、アメリカの紙幣と銀貨でなければ受取らぬと云ひ張つた。米軍のレイモンド・H・片山軍曹が日本人の一人、秘書役をしてゐる溝田周一と仲好しになつた。

溝田は窓際に立つてマユラの廢墟を眺めてゐた。彼は多分會談から仲間外れにされたせいだらうが、いかにも不幸さうに見えた、と片山軍曹が後に語つた。

「この廢墟は東京よりはひどくない」と溝田は云ひ、神戸・大阪・横濱はもつともひどいといつて加へた。

片山軍曹が日本語で、廣島が原子爆弾でどれほど破壊されたか、と聞くと、彼はしばらく黙つてゐたが。

「廣島は破壊されたんぢやない。この地上から消されてしまつたのだ」と云ふのだつた。

## 相模灣

相模灣頭ニコラス艦上にて。

乗組員のイラ・アレンはクラ灣の戦闘中首に掛けてゐた四ツ葉のクロバーを相變らず掛けてゐた。ディック・グリーンは同じブライヤーパイプをふかし、チョセフ・モルは相變らず靴をぴか／＼に磨いてゐた。今日はひどく重大な日なのである。ガダルカナルから日本の海岸までハルゼイと共にあらゆる道を通つて來た驅逐艦ニコラスは、横濱から出て來る日本の使者を出迎へる役目を司令官から仰せ付かつたのだ。その日本人たちはアメリカ艦隊が東京灣に入るのを案内する筈だつた。

六時數分過ぎ、船橋の見張りアイム・モリセツトが肩越しに「見えたぞ——艦首左舷」と叫んだ。間もなく我々にも水平線上の雲の向ふにぼんやりとした塊が見えて來た。信號ブリツチではトーマス・カンサーガが國旗掲揚臺に走り上つて、初めてみるニツポンに眼を凝らした。彼の兄弟はボタンで捕虜になり東京附近の收容所にある筈だと思はれてゐた。

艦隊の隊形が變り始めた。戦艦のミヅリーと、アイオワとデュークオブウルクとは後になつて、他の艦は前進した。先頭はニコラスだつた。雷撃機が三機、非常に低く頭上を飛び過ぎた。七時十分、甲板の上の砲戦指揮所のヘンリー・ウォーレスが「眞心面に艦型不詳一雙見えます」と叫んだ。水平線上を眞直に我々の方に向つて一雙の艦が進んで來た。ニコラスの乗組員は戦闘配置に就いた、砲戦指揮所の上ではリチャード・タンナーとハロルド・ロールが測遠器の焦點を合せて射距離を計り始めた。千八百ヤード、急速に近づいて來る。ニコラスは他艦を後にしてスピードを落した。端艇乗組員が端艇に飛びこんで、中の座席に白いシートをひろげながら出發した。

ニコラスの端艇はまっすぐに進んで行つた。艦にはアメリカの旗が蒼い海にくつきりとはためいてゐる。舵手のロイド・ブレイクスリイが舵の柄を引いて端艇を日本艦の舷側に手際よく着けた。艇首漕手のレオ・マイルスが新しいマニラロープを投げると日本艦の乗組員がそれを掴んで、端艇を舷側につないだ。

すべてが静止の状態になつたやうだ。

端艇の士官も水兵も日本艦を見上げた。日本人たちは手摺に群つて下を見下してゐた。

ニコラスの艇長はもどかしがつて、いきなり怒鳴つた。

「何を愚圖々々してゐるか。早くボートに乗せんか！」

静止の状態がそれで破れた。

日本人の一行が船室から出て来て舷門の周圍に集ると端艇に降り始めた。

間もなく舵手のブレイクスリイが大聲で合圖をして端艇は漕ぎ戻り始めた。

ニコラスの舷側に着くと、日本の使者は甲板に昇つて、彼らを士官室に案内するため甲板に待つてゐた士官に敬禮をした。

使者の中で上級と見える二人は士官室の真中の卓子の上席に坐り、他の連中はその周りと壁際の革製の長椅子に坐つた。彼らの顔は機敏らしく見え、その眼は室内にゐる我々や戸口に立つてゐる武裝した衛兵を見廻してゐた。

上級の二人は灰緑色の軍服を着て肩から四條の金の參謀章をつけてゐた。一人は左胸に三箇の略章をつけ、他の一人は二列だつた。兩方とも甲板を引きずるやうな長い刀を左腰に鈎つて

ゐた。一人は横須賀鎮守府から、も一人の方は東京の海軍省から派遣されたのだつた。驅逐艦隊の司令官が入つて来て、

「通譯は誰か」と云つた。

二三人立つと司令官が云つた。

「一行に、身體検査の必要があると云つて呉れ給へ」

通譯の一人が、

「我々は武器を隠してはなりません」と答へた。

すると司令官が、

「それにしても、軍刀は外す必要があるだらう」と云つた。

一行の大部分は彼の云つたことを理解したやうだ。みんな立ち上つて刀を外すと卓子の中央につき重ねて、又坐つた。しばらく緊張した雰圍氣になつたが、間もなく各自に煙草を取り出すとすばくやり出した。

寫眞班が撮影するために椅子の上に昇つた。若い士官と通譯が面白さうにそれを見つめてゐ

た。閃光球がボンと音を立てるとみんなぴくんとして、それから笑ひ出した。

中の一人は食器棚にある「シレッタス」コーヒー沸しにひどく興味を惹かれたやうだ。傍に寄つて綿密にしらべてゐた。他の連中は數冊の雑誌「ライフ」を見つけ出し熱心にひらいてゐた。一人が最初に注意を惹かれたのは二頁にまたがったグアムの滑走路上のB29の寫眞だつた。彼は寫眞の滑走路上に列んだ機數を數へでもしてゐるやうに唇を動かしてゐた。アイゼンハウワーやキングなどのサインしてゐる戦時公債の廣告を夢中になつて讀んでゐる者もあつた。

端艇は四回往復して全部でパイロット十三人、海軍の使者二人、通譯六人を運び終つてゐた。通譯の一部は普通人で、一人は年配で褐色のリンネルのズボンをはき、疲れた上衣を着てバナマ帽をかぶつてゐた。も一人の方は東京の大學から來た倫理と哲學のプロフェッサーだつた。彼は一九三九年にはニューヨークシティのロンビア大學の學生だつたと語つた。

かうしてゐる間にニコラスはスピードを落した。

係の士官が入つて來て、通譯に、海軍の使者を移乗させる爲に我々は今ミゾリーの舷側に向

つて進んでゐるんだと云ふことを一行に傳へるやうにと語つた。

これが通譯されると數人が立ち上つて、舷窓からじいつと外を眺めた。ミソリイとアイオウは一哩足らずの近くにぼつきりと見えてゐた。日本人の一人は頭を振り、驚いたやうな顔で微笑んだ。そして、

「ほう。あれは新しいのかねえ」と質ねた。就役して一年にしかないと答へると、彼は再び頭を振り、又舷窓に向きかへつた。

ミソリイの舷側に引き寄せられてゆくと、巨艦は夏の日曜日の午後のヤンキースダチアムみたいたつた。メインデツキからマストの見張所まで青いジャケツとカーキ色の軍服でぎつしり一杯だ。艦の十六時の主砲は廻轉されて、十哩彼方の大島に眞直照準をつけた。艦の前後には大きな星條旗がひるがへつてゐた。水兵たちに占領された艦橋の空いたところには野球帽をかぶり日除け眼鏡を掛けた氣易げな姿が見えた。ハルゼーも見物に出て來てゐた。

綱が渡され、白いレースで様飾りをした赤い椅子が渡つて來た。一行の幹部である二人の將校が甲板に呼び出された。シエルマン・メレデイスがその一人に手眞似で説明すると、彼らは

前に進んで、大膽に姿勢を正してその椅子に腰掛けた。巻いた海圖を膝の上に持ち、片方の腕にはレインコートを掛けてゐた。ニコラスの甲板水兵が彼らをきちんと椅子に締め着けた、そして兵曹長の呼子が高くなると彼らは普通の市民が乗物に乗つてゐるやうな落ちついた恰好でする／＼と空中に昇つて行つた。あまりいゝ氣持では爲いやうだが、威嚴を失ふまいと決心してゐるやうな面持であつた。

その時突如ニコラス艦上の日本人から叫び聲が起つた。日本の驅逐艦が進路に鼻先を突つこんで來たのだ。

ニコラスの艦長が通譯を艦橋に呼び上げ、進路から押し退けるやうに命じた。

日本の驅逐艦は氣が進まないやうに向きを變へた。

數分後残りのパイロットと通譯を艦隊の各艦に移乗させるやうにとの命令が届いた。

やがて、アイオワとデュークオブヨークを眞近に従へたミソリイを先頭に、第三艦隊の艦列は東京灣の入口をなす相模灣に急速に進入し始めた。

日本の海岸線は、最初は水平線上に極めておぼろに見えてゐたが、見る見るうちに高い凸凹

のある丘と村落で飾られた狭い海岸とに變つて行つた。

十三時三十分數分過ぎ、艦隊は停止して、碇を下した。

港の彼方に頂の白い大きな青みがうつた灰色の山が聳えてゐた。

何と云ふことなしに親しげに見えた。

それがフジャマだつた。

エバン・ウイリイ

## Horrible Disgrace

## 辱恥きべる恐

## 近衛公の自殺

解説

「ニュー・ウイーク」誌に掲載された近衛

文磨公の自殺に関するこの一文は、短いも

のではあるが、米國人の近衛文磨觀がはつ

きりとうかがはれる。

東京郊外の飾り氣のない家に遅くまで灯がついてゐた。

戦争犯罪人と確定されて監獄に出掛ける前夜近衛文麿公爵が友人と親戚の人々を款待してゐたのだ。千代子夫人は主婦として接待してゐた。令嬢の島津夫人と二男の通隆とが何くれとなく手傳つてゐたが、日本の陸軍大尉として満洲で働いてゐる長男の文隆だけはゐなかつた。

外見にはいつもとかはらず近衛公は客と優しく談笑してゐた。そして客が歸つた後、二時頃まで通隆と語り合つた。

六時に千代子夫人が書齋の灯のまだついてゐるのに氣がついて、そつと消しに行つた。

が、日本風に疊の上に敷かれた蒲團の傍に小さい黒い瓶がごろがつてゐるのを夫人は見つけた。

彼女の呼聲に牛田秘書が駆けこんで來た。

彼の主人の身體はまだ温りが残つてゐた。

が、アメリカの軍醫は青酸加里による毒死を確認した。

半ば歐化した擬装自由主義者の貴族にとつては自殺が論理的終局であつた。(然し、皇族である梨本宮守正王は平然と喚問に應じた)日本の五大神聖家族の筆頭であり、尊敬された先代の嗣子である近衛文麿は、日本の最後の元老西園寺公望公の保護を受けることになつた。若き文麿はベルサイユ會議に西園寺公に隨行し、彼から政治の技術を學んだ。彼は又ルソーやマルクスの危険思想をも學んだ。

日本人としては大きな、六尺の長身は仕立の良い歐風の洋服をびつたりと着こなせたし、佛語英語は流暢に話し、西歐の社交界にはふさはしい人間たつた。日本と西歐の自由主義者には、彼こそ日本を救ひ得る人間だと思はれた。

然しやがて彼の弱體ぶりがあらはれて來た。大東亞共榮圈の發見に彼は關與した。一九三七年彼は總理大臣となり、一月後に中日事變が勃發した一九四〇年に彼は再び大命を拜して日本に未だ嘗て現れなかつた協力内閣を組織した。彼の第三次内閣は一九四一年の十月「眞珠灣」の二月以前まで續いた。

近衛は軍を抑制しなかつた。危機に直面すると病氣になつてひつとむだけだつた。

日本の敗北の後、彼は聯合軍に良く思はれようとはかない試みをやつた。

通隆は父が前週、彼との話の中で「不思議」な沈黙をしてゐたと語つた。

然しその後彼は、その日の朝鉛筆で走り書した遺書を呈示した。

死せる公は云つてゐた。

米國が自分を戦争犯罪人と指名したことは最も遺憾なことである。現在の激しい感情が消え去つた時にのみ始めて、神慮の正しい判決は下されるであらう。

自殺の數日前公はオスカーワイルドの「*De Profundis*」を讀んでゐた。そして赤鉛筆で次の個所にアンダーラインを引いてゐた。

「私は自ら亡びる。如何なる人間でも、彼自らの手に依らずしては亡びることはない……私に恐るべき恥辱に亡びた」

の社化文版出灣臺

# 美 國 報 道 選 書

## ★天皇日「否」

メリラツト大佐

敗戦直前の南西諸島で行はれた悲劇があまりすところなく描かれた問題の書。美軍のヒューマニズムの美しさ。

## ★將軍山下降伏す

ボツブ・マツクミリヤン

「馬來の虎」と仇名された將軍山下の降伏する情景を描いて、映画的な報道の妙味を示す。

## ★原子爆弾と次の大戦 東京の薔薇

バルトウイン  
デール・クラマー

アメリカ兵の郷愁をゆすぶつた、覆面の女性の正體を暴露!!

## ★日本空襲の實相

カーリスル・バーゲロン

美國はいかに日本空襲の作戦をたてたか。この計畫の遂行によつて日本の首都東京は灰塵に歸したのである。

民國 93 年度  
教育部補助



以下續々刊行

國家圖書館



002855220

A134



臺灣出版文化社